

小学校は

エンピツの

匂い



東京学芸大学 附属

小金井小学校

同窓会

撫子の会

会報

11

号

もくじ

- 1 会長メッセージ
- 2 副会長メッセージ
- 3 母校からのメッセージ
- 4 恩師を語るパートⅡ
- 5 特別寄稿
- 6 クラス会をしました

イチヨウの歴史とイチイの風

撫子の会々々 金子修也

校庭の二本の木

小金井の校庭には、豊島から移植したイチヨウの木と、昨年の豊島創立百周年・小金井開校五十周年を記念して撫子の会が贈ったイチイの木があります。

そのイチヨウには、戦災で焼けこげたにもかかわらず息を吹き返した歴史があります。イチイは木目がとおり高くすくと伸び明るい色の葉を茂らせる、姿の美しい木です。撫子の会は後輩たちがそのように育つことを願ってこの木を贈りました。

うれしかった、小さな手とのハイタッチ

昨年の周年記念式典で、同窓会会長として祝辞を述べた時のことです。式典への生徒の出席は代表だけのようだと聞いていたので、私は草稿をオトナ向けに用意していました。ところが演壇から見渡せば、かわいい生徒さんたちが会場の中央部いっぱいに行儀よく着席してはありませんか。私はあわてました、一年生にも伝わるよう話さなければと。原稿にある言葉は役立ちません。私は子供たちの目を見ながら「小金井には豊島・追分から受け継いだ香しい校風があること、風は見えないけれど木々のあいだにそよぐとき感じとれるもの、校風もさらには社風や国風もそのように感じとれるもの、良い風（ふう）を持つことがだいじ。よい校風をつくり残そうね」というような話をしました。

そして式典が終了退場したときのことです。通路に近い生徒たちが「じ〜じ」といいながら、小さな手をこぞって伸ばしハイタッチをしてくれて、パチ

ンパチンと温もりが伝わってきました。じ〜じはうれしかった。そして実感しました。もはや豊島も追分もない。あるのは、校庭に百周年のイチヨウと五十周年のイチイが育つ、そして校風という遺伝子でつながった子どもたちがいる、この小金井だど。二本の木に託し、歴史を重ね香しい校風がそよぐ母校でありつづけることを祈ります。



右の写真 イチヨウの木
左の写真 イチイの木



「ごがねい小 百歳おめでとう」

副会長 川田紀雄（昭和四十一年小金井小卒）

二〇〇九年の十一月十九日は子供達主催の母校百周年お祝いの会でした。一年生から六年生まで全員が体育館に集り、小学校の百歳の誕生日、という趣向です。子供達が主体となって企画したそうです。私も同窓会の代表としてお祝いと記念の植樹のために参加して来ました。午前中、少し早めに準備のために学校を訪問、植木屋さんを待ちます。

お子さんが昔、附属幼稚園に通っていたという小金井の造園屋さんで、何とも予算不相応な大きいイチイの木を運び込んでくれました。イチイは真っ直ぐに伸びます。しかもゆっくりゆっくり十年で一メートルくらいしか伸びないそうです。ですから五メートルはあるこの木ももう五十年は経っているんですね。そういつたことがイチイの木を記念樹に選んだ理由でもあります。

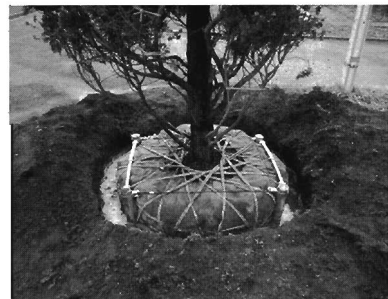
植木屋さんがおおよその準備をすませ、式典後、子供達が全員でひと握りずつの土を掛けていこうという作戦です。

お祝いの会では不肖私も祝辞を少々。

個性偏重に一石を投じるべく、「ひとりひとり」が違ってもいいけれど、みんなが同じものを食べて同じ遊びをすることはもったいなく、それが素晴らしい思い出になって同窓会になっていきます



よ。」というお話しをして来ました。少しは伝わったかな。



豊島の銀杏（としまのいちよう）

樹幸 澄枝（昭和十八年豊島小卒）

この銀杏の木は、JR池袋駅前の、今は西口公園や東京芸術劇場になっているところにあった豊島師範学校附属小学校（豊島小学校）の校庭に植えられていました。しかし昭和二十（一九四五）年四月十三日の夜に空襲があり、となりにあった師範学校や寄宿舎は、この時全部焼けてしまいました。一面の焼け野原の中で、附属小学校だけがポツンと建っていたそうです。校舎にあった銀杏の木は、まるで校舎を守るかのように半分が焼けこげて真っ黒になってしまいました。

戦争が終わったのは、それから四か月たってからでした。いなかに避難（疎開）していた子供や先生が、少しずつ学校にもどってきて、学校はにぎやかさをとりもどしました。そのころは食べ物や着る物も少なく、大人も子供も、生活するのなかなか大変なときでした。銀杏の木は、半分が黒こげになっ

ました。この元気さは、戦争から立ち直ろうとしている人々を大いに力づけました。

「豊島の銀杏の木」という歌が、作られました。この歌が大好きだという子供や先生が多く、歌集をつくって、いつも明るい声で歌っていました。

その後、池袋にあった学校はなくなり、豊島小学校の子供たちは多くが小金井小学校に移ってきました。銀杏の木も、やさしさとたくましさを感じてほしいという願いで昭和三十八（一九六三）年の夏、トラックで引越して、ここに植えられました。半分しかなかった幹は、黒こげをかくすようにだんだん大きくなりました。こんどは、小金井小学校の運動場の真ん中で大きく枝を広げ、子供たちを見守っています。

新たな百年に向けて

校長 飯田秀利

皆様ご存じのように昨年度は創立百周年の式典が行われました。したがって、今年度は新たな百年の第一歩の年になります。本年度の学校運営方針は「原点からのチャレンジ」であり、（１）発展学習を基にした研究心育成、（２）集団宿泊生活による全人教育、（３）教員養成の質的向上、（４）特別支援教育の充実、の４つを原点に据えて教職員一丸となって取り組んでいます。

ところで、昨年刊行された創立百周年・開五十周年記念誌「なでしこ」を読みますと、明治四十四年創立以来の興味深い写真や沿革の記事のほかに、附属豊島小学校と附属追分小学校の校歌も載っています。この中には開校当時からの子供たちへの願いが込められています。たとえば、豊島小学校の校歌

には「くにの広きを眺めつ、広きをおのが心にていとゆたかに育てかし」とあります。また、追分小学校の校歌には「自由の旗に つどいてうたい微笑かわして 理想へ進む」とあります。これらの歌詞の一部は、言わば本校の原点に通じると思えます。そして、現在の小金井小学校の校歌にはそれを引き継ぐかのように「いたわりあつて のびのびと のぞみを高く この胸に」とあります。

時代が変わっても、百年後も百年後も、親と教職員の違いはただ一つとします。すなわち、子供たちが良き学校の教育を通じ、豊かな心と能力を持った立派な大人に育つてほしいというものです。私たち教職員は、百年の伝統を大切にしつつ時代の変化に対応しながら、この願いを叶えられるよう全力を尽くしていきたいと思えます。

百年という歴史の

副校長 関田義博

創立百周年を祝う行事では、撫子会の方々に大変お世話になりました。ありがとうございます。小金井小学校は、二十二年度から飯田秀利校長先生をお迎えして、新たなスタートを切りました。

この夏、私のところにアメリカ・ミシシッピ州のコットンランディア博物館から次のようなメールが入りました。

「戦後しばらくして東京学芸大学附属豊島小学校から送られた水彩画が最近見つかり、保存状態がよいので近々博物館に展示したい。そこで、できれば学校の最近の情報を教えて欲しい。」

私はすぐにメールに添付されていた16名の子どもの名前と豊島小学校の卒業生名簿を照合しました。

子どもの名前はアルファベットで表記されていて、多少表記が間違っている箇所もありました。その結果、十六名中十五名は探し出すことができました。

十五名の子どもの名前は、いちばん年長の方が昭和十八年卒で、いちばん年少の方が昭和三十一年卒でした。おそらく、美術を担当されていた先生が子どもの作品を保管していて、それらをまとめてアメリカに送られたものと考えます。残念ながら、どうしても見つからなかったのが、「かわすみたかお」という名前の方でした。十五名のお名前については、この文章中で公表しようかと考えましたが、間違いがあるといけないので、編集を担当されている方にだけ、お知らせすることにします。

このようなことがあり、今年が創立百周年にふさわしい夏を迎えることができました。

恩師を語るパートⅡ

白井鉄兵先生

和田恵美子（昭和三十四年～三十八年）

豊島小在校、四十年大泉小卒

白井先生と私たちの出会いは、一年生二学期に始まります。学芸大卒業後間もない先生とは、まさに「フレッシュマン」同士の邂逅でした。先生には二年生まで担任戴き、その後四年生の終わりに豊島小は廃校となり、この学年は他の四附属小あるいは公立小に、分散いたしました。

昨年十月、一組白井学級としては五十年振りに感動的な再会を果たし、二十数名の級友と共に思い出話や近況を語り合いました。

その中で、今尚私たちの目に焼き付いているのは、先生の高鉄棒での大車輪です。水泳、体操、球技に万能な先生は、まさに一組のヒーローでもありました。また、児童ひとりひとりのありのままを受けとめ、各人の成長にご尽力戴きました。日頃物静かなAさんが授業で発言しようとしたところ、隣の豆博士で黙っていられないB君に阻まれ、チャンスを逃すところを先生の適切な指導により、Aさんは早く発言でき、その喜びを帰宅後お母さまに語り、早速お母さまが先生に感謝の電話をされたそうです。

たまたま私は先生のご両親に生前お会いする機会に恵まれました。お父さまは、伊豆大島元町小学校で長い間校長を務められ、居住まいを正される風格の中に温かさを感じる方で、盆栽を得意とされ、鳥民から信望を集められておられました。お母さまは、内助の功でそのお父様を支えられ、情の厚い心底善い方で、家庭菜園や和裁がお上手な働き者でいらっしやいました。先生ご自身のご努力は勿論のこと、このようなご両親の元で成長された先生のお人柄は申し上げるまでもございません。

現在先生は難病を抱えられ、ご不自由な生活を余儀なくされておられますが、そのような状況におられても変わることはない細やかなお心遣いで、私たちを見守ってくださいませ。その先生を慕い、感謝を込めて、この十月また「一組白井学級」に元児童たちが参集いたします。



内藤省孝先生

堀江政生（昭和五十一年小金井小卒）

この七月、二十年ぶりに内藤先生にお会いした。「大きくなって」と笑いながらおっしゃる。「よしてくださいよ。我々ももうすぐ五十ですよ」八王子の真新しい駅ビルの中で、そこだけ昭和に戻っていた。直前まで入院されていて、それも心臓というからとても心配をしていたのだが、非常にお元気で安心した。それどころか、凜とした佇まいはまさに当時のままで、逆に「また叱られる」と緊張がよみがえったくらいだ。

内藤先生との出会いは鮮烈だった。まだ低学年だったある日、朝礼が終わった後、クラスのみんなは教室に戻ったのに、校庭に一人残されて叱られた。余程態度が悪かったのだろう。「先生は君のことを覚えておくから」と最後におっしゃった。以来、校内で内藤先生を見かけると柱の陰に隠れるようにしていた。しかし、そうはいかない状況が生じた。五年生の時、担任になられたのだ。

実際、よく叱られた。そして、爪を剥いたり、腕を骨折したりと再三怪我をして心配もおかけした。結果的に二年間受け持っていたのだが、常に内藤先生を心底信頼し、尊敬をし、全身を委ねていた。確認を取ったわけではないが、クラス全員がそうだった。

先日の再会で、はじめてプライベートなことを伺った。先生の年さえ知らなかった。昭和七年生まれ。戦後貧しくて高校を中退され、東京を離れ長崎に行かれたこと。苦勞して大学に入り先生になられたこと。その間にお世話になった人々のこと……

内藤先生が担任になった日。先生は黒板にきれいな

大きな字で「人にやさしく、自分にきびしく」と書いた。それが先生の座右の銘であり、クラスの目標となった。言葉の背景を実に三十六年たって知った。帰りがけ、一緒に行った元同級生と話した。「昭和七年ということは、僕らの担任だったころ四十二歳か：本当に大人だったよな」気が付くと当時の先生の年を五つも上回ってしまった。相変わらず自分に甘く他人には厳しい。

内藤先生は今年七十八歳。矍鑠としておられた。座右の銘とともに、内藤先生その人が、私の目標だということを改めて感じた再会だった。



恩師との再会

吉川 勝（昭和五十四年小金井小卒）

平成二十年、二十一年度の金小のPTA活動をしていた関係上？、財団法人豊島修練会（至楽荘、一字荘の管理法人）の理事に選出され、理事長の鈴木勇先生（二〇三年時の担任）、常任理事で成美教育文化会館の館長である大場晃先生（卒業時の四組担任）、理事の菊田英一先生（四〇六年時の担任）と感動の再会を致しました。

正義感を振りかざしてはいましたが、授業態度劣悪、スカートめくりの達人である金小開校以来の問

題児と言われていたこの私。私のこの溢れるパワーは、皆の為に使うべきだと論してくれたのが鈴木先生でした。先生の言葉に目覚め、三年時に代表委員（学級委員）となり、最下級生ながらも委員会の副委員長として、クラス皆の為、金小児童全員の為に頑張る「愛」を知ることが出来ました。目を瞑れば、光明山荘で一緒に風呂に入った光景を何故か四十歳過ぎた今でも、度々思い出してしまうほどの恩師であります。

菊田先生は、私の溢れるパワーを学業に向けさせるキッカケを与えて下さいました。先生の「吉川は、ヤレば出来る！」という呪文は、勉強嫌いだっこの私を負けず嫌いの頑張り屋に変えてしまったのです。

大場先生は、問題児のこの私を愛のある体罰で厳しくご指導して下さいました。とにかく怖い先生でしたが、大変人気があり、私も大好きでした。三十年ぶりにお会いした先生は、昔の勇敢な面影はさほどなくて、温厚そうな優しいお姿に多少驚きましたが、愛情溢れる語り口は当時のままで、懐かしさと同時に安心感に包まれました。

恩師の愛に応え、また愛する母校金小の為に、これからも微力ながら、同窓会活動や豊島修練会の理事としての活動を通して、「ヤレば出来る！」の信念のもと頑張って行きたいと思えます。

榎本隆治先生

川城丈夫（昭和二十八年追分小卒）

私たちが追分小学校を卒業してから六十年近くの年月が過ぎました。私たち卒業生は追分卒業の後も多くの師と巡り合いながらそれぞれの人生を歩ん

できましたが、そのなかでも榎本先生は我々にとつては忘れ難い恩師のなかの恩師であります。

そして今こうして筆を取りますと、小学校時代のいろいろなことが思い出されます。榎本先生は真っ白の体育着の上下できりっと身を包み、海兵団で鍛えられた美しい立ち姿ですと立っておられ静かに鉄棒に飛び移り、大車輪を見事に何回も回られました。われわれ小学生は「すごい、すごい」とただ驚き、憧れるばかりでありました。私たちの榎本先生は当時も今も凛とし、颯爽とされております。

教室では先生が戦時中に乗艦しておられた駆逐艦峯雲と戦艦比叡でご自身が体験された南の海での話をよくされたことを覚えております。先生が近年著された「来し方を顧みて」には「その場を逸することのできない危機感を初め、歓喜・悲嘆・快哉等々、個人の肺腑を抉る様な体験を重ねつつ、漸く静かな昨今となりました」という記述があります。しかし先生は子供たちには戦争の肺腑を抉る様な艱難辛苦の話あるいは悲惨な話はしないと心に決めておられたのだらうと思います。我々はただ見たこともない大きな船の話、その大きな船が大嵐の海で翻弄された話などを固唾を呑んで聞いた日々を昨日のことのように想い出します。そんな思い出を創って下さいました。

約六十年前に先生からお教えを頂いたことが七十歳近くになった今もしっかりと私たちのなかに生き生きと息づいています。私個人について書かせて頂きますと、例えば「君は、行動敏にして、熟慮に欠ける」と教えられました。これは今尚なかなか直りませんが、このお教えを日々噛みしめて仕事をしております。私の両親も先生を尊敬しており、私の両親と私たち夫婦とで先生をお招きして感謝の会

を度々持ちました。この会は私の両親が元気であった間続きました。両親は榎本先生の話をよくしており、先生は忘れることができない教育者であったようです。

何年前に先生が叙勲された折に、お祝いを兼ねてわれわれ同期生が集まろうという話が生まれましたが、実現できないまま時間が過ぎておりました。しかし「とにかく暫くぶりにお目にかかりたい」と今年八月二十三日（金）にごく少ない人数でしたが先生に急遽お会いすることが出来ました。先生は九十歳になられますが、矍鑠としており、昔と少しもお変わりありませんでした。日本酒をゆつくりとおいしそうに一合召し上がった姿が印象的でした。近い内に同期会を必ずしようと話し合い散会しました。

先生は教育者として全うされてきましたが、これからも私たちにとって先生のなかの先生であり続けてゆかれます。

松村謙先生

斉藤日出雄（昭和三十年追分小卒）

小学生時代に松村先生に育てられたことは一生の宝であり自分の原点だと思っている。級友とは男女を問わず仲良く、和やかで子供らしい活気のある教室だった。

昭和二十四年に入学、敗戦から間もないころである。付属とはいえ親たちも裕福な方ばかりではなくまして物も社会インフラも不足してはいたはず。そんな中で大いにのびのびと育てていただいた。

父親母親がとても熱心に教室にかかわり、親同士が親密で協力しあっていた。今でも友人のお父さん

お母さんの顔がたくさん記憶に残る。なぜそうなったのだろうか？

私は、価値観の変化したあの頃に、親たち皆が、子供のあり方への先生の確固たる信念に共鳴し、松村先生を心から尊敬し教えを受けていたのだと思う。そしてそのことを喜び誇りにしていたのだろう。

松村学級は親子で生徒だった！

久しぶりに卒業文集を取りだし先生の文章を読んでみた。先生が我々一年生の受け持ちになって最初に考えたこと、として

「まず、皆さんのお父さまやお母様同志が、本当に仲よしになっていただきたいことです。」「本当の仲よしというのは、自分の家の子供のことだけでなく、学級全体の子供たちを、すすすくのびしていくために力を合わせていただくことでした。」

親同士が先生の言う本当の仲よしだったから、我々も安心して元気に仲よく遊ぶことが出来たのだ。

ちなみに卒業文集には先生、生徒のあとに父母の作文が載っている。松村先生のお考えがそのまま表れていることに今になって気がついた。



特別寄稿

「ドライフラワーを

以って任ずる撫子の戯言」

「校章・校歌・行事・その他もろもろ」

猪俣節子（昭和十五年豊島小卒）

秋の七草の一つ、初秋に咲く河原撫子（かわらなでしこ）の事。花は可憐だが、性質は丈夫で河原では他のさまざまな草に負けず花を咲かせる。だからこそ、たおやかで強い日本女性を例える言葉、ヤマトナデシコの語源になって居る。花言葉 聡明、思慕、純愛、才能、大胆、快活、女性の美

撫子や そのかしこきに美しき

惟然

なでしこや 人をたのまぬ世を過し

汀女

昭和すでに 撫子はみな何処へ行きし

苑子

紺色のフェルトの帽子、白いウールの丸襟のブラウス、紺色のヒダ付きのジャンパースカートの胸に淡い金色の校章が輝いて居た。夏は明るいブルーグレーのベルト付きのワンピースに白いピケ帽。どれにもこれにも撫子が光って居た。今思い返すとその時代としてはちよつとシャレた品格？ある制服だった。冬は黒の長靴下、黒の革靴、子供心に電車に乗っても何となく誇らしく感じたものだった。

現在の様に、口が裂けても「私服がイイイ！」なんて叫ぶ事は有り得なかった。

小学校時代、四方拝、紀元節、天長節、明治節、教育勅語を賜りたる日？等々、何時も本校の講堂で式が行われた。白手袋の主事先生が、黒塗りのお盆？の上の紫の袱紗に覆われた巻物を恭しく捧げ、やおら退屈な奉読の時間が始まる。

「朕惟フニ、我方皇祖皇宗、国を肇ムルコト宏遠ニ、徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ。我が臣民、克ク忠ニ、

克ク孝ニ、億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ、此レ我が国体の

精華ニシテ、教育ノ淵源亦実ニ此ニ存ス。爾臣民、父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和シ、朋友相信ジ、恭儉己ヲ持シ、博愛衆ニ及ホシ、学ヲ修メ、閔ヲ習ヒ、以テ知能ヲ啓発シ

徳器ヲ成就シ、進テ公益ヲ広メ、世務を開キ、常ニ国憲ヲ重シ、国法ニ遵ヒ、一旦緩アレハ、義勇公ニ奉シ、以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ……」

明治二十三年十月三十日

御名御璽

そして「今日のおよき日は大君ノを、生いまれ給いし佳き日なり」「雲に聳ゆる高千穂のオー高嶺おろしに草も木も」「代々オー木の森の代々オーとこしえに……」等々の歌で終わる。（教室に戻ってから、祝の字が記された紙に包まれ、撫子を象った紅白の甘い落雁を頂いた記憶がある）さっぱり意味の判らない「教育勅語」が今日まで口をついて出てくる妙

教室から本校の講堂までの往復は結構距離があり、長い廊下と数段（七〜八）の階段があった。教室に戻ってから先生に「今通った階段は何段有ったか？」と質問され誰も答えられなかった。その頃はもう盧溝橋事件、支那事変が勃発し世の中は戦争を意識して居た。停電も多くそれも二、三時間続く事がしばしばだった。「往きに通った階段の段数覚えて置かないと、帰りに停電になったら暗がりて怪我をするかもしれない。何事も神経を集中し、一つ一つをしっかり意識を持って行動しなさい」とご注意を受けた事をあちこちの階段を上がり下りする度、老いた現在でも頭を掠め無意識に段数を数えて居る自分を発見する。

豊師附小の校歌の三番に「君の恵みや父母の恩、教えの庭の培いに……」の歌詞が有るが、長じてクラスメートのお一人が「土買いに」だとはっかり思っ

てたと述懐され「不動産屋の買占めって事？」と大笑いした事があった。思い起こすと、校歌の歌詞についてあまり解説された事が無かった様に思う。

そうかと思えば昭和十四年五月、五年生の時と記憶しているが「青少年学徒に賜りたる勅語」が天皇の名に於いて発布され、其の解説を夕食後、箱根一宇荘の畳の大広間で全員正座して聴かされた。

「国本ニ培ヒ、国力ヲ養ヒ以テ国家隆盛ノ氣運ヲ永世ニ維持セントスル。任タル極メテ重ク道タル

甚だダ遠シ、而シテ其ノ任、実ニ繋カリテ汝等青少年学徒ノ双肩ニ在リ、汝等其レ氣節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ、古今ノ史実ニ稽ヘ、中外ノ時勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ、其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ワズ」こんな文章だったと記憶している。冒頭の「国本ニ培ヒ」の五文字の解説に延々二時間近くかかり、この調子では全文解説し終わるのは明日の朝になってもムリだな……とウンザリした事を覚えている。

内容は何も覚えて居ないが其の情景は鮮明に記憶して居る。確かお講義の主は四宮先生だった様に思う。（濡れ衣だったら申訳ない）が、それにしても、コックリ、コックリ眠気は催すし足は痺れるし幼心にも呆れるやらイカるやら……決められた就寝時刻はトウに過ぎて居るんだぞオー変な思い出！

神武、綏靖、安寧、懿徳、孝昭、孝安、孝靈、孝元、開化、崇神、垂仁、景行、成務、仲哀、応神、仁徳、履中、反正、允恭、と未だに歴代天皇の名前を百二十四代まで諳んじられる。これらは精々十二〜三歳位迄の記憶で「終戦の詔勅」になると花の十八歳、もう断片的にしかアタマに残って居ない。「朕深ク世界ノ体制ト帝國ノ現状トニ鑑ミ、非常ノ措置ヲ以ツテ時局ヲ收拾セント欲シ、茲ニ

忠良ナル汝臣民ニ告グ」「時運ノ赴ク所、堪工難キヲ堪工、億ビ難キヲ億ビ、以ツテ万世ノ為ニ太平ヲ開

カント欲ス」長文の中のほんの一節でしかない。

そして八十歳の現在は昨日のおかずも忘れ、大切な事案もサッパリ！言ったア、言わなア、聞いたア、聞いてなア。人間のお脳はどうなっているのだろう。お脳の引出しが軋んで動かない。冷蔵庫の前で弁慶の立往生ヨロシク首を捻るのは毎度の事。コレを称してボケと言うのか、今どきは認知症と言うのか。大昔の事はかり話す「老いの線言」と言うのか？ 全てアレ、コレ、ソレの連発で判断はお相手に任せる事と相成る。言わんとする所「鉄は熱い中に打て！」幼少期の詰め込み教育は結構役に立つと実感！

我々の時代は両親始め大勢の兄弟姉妹に囲まれ、一つの小さな社会を形成していたのかも知れない。知識だけでなく知恵も教えられたと思う。視野を広げ視点を交え、多角的に物事を観察すれば全然変わって見えるのだと気付かせてくれた。知恵と要領を取り立てて意識しない内に少しは会得した事、感謝して居る。

昔は手紙と言えば自筆の手書き。便箋、封筒、葉書、総てに「必ず年月日を明記しなさい」と父に厳しく言われた。文字も文章も素晴らしいお便りは大切に保存しお手本にするように、「頂き物に対するお礼状は、其のお品に対する自分にとっての思い出、感想、因縁、家族みんなで感謝して話題になり盛り上がったと、事細かに情景を記しなさい」と小学校の上級生頃から書かされ朱筆を入れ校正された。其の教えが頭の片隅にコピー付き、年月日の件は忘れずに記す習慣がついたのかと思う。頂くお便りを拝見すると私的なものは、大半は記されて居らず、素敵なお便りは受領年月日を記入し大事に何度も読み返して居る。これも子供の頃に教えられた一つかも。父との約束か、単なる自己満足か：「法則に則り、比

喩を用い、因縁を語るべし」「難しい事を易しく、易しい話を深く、深い話を面白く語れ」と：

食品にしても当時は賞味期限、耐用年数等は記載されて居らず、人間の本能である五感、自分自身の嗅覚、視覚、味覚、触覚、聴覚で判断し家族の健康を守った。現在は家電製品その他、何でも事細かに五月蠅い程指図され、自分でものを考える術を忘れさせ、多くの指示待ち人間、思考力欠如の人間を育てた。全国五百二十万台も町に溢れた自販機は、人々から語彙、礼儀を奪った。無目的、無作法、無責任、無自覚、無批判、無常識、無気力、無反応、無関心、無節操、数え上げればきりが無い。この不条理、この状況は進歩か退歩かワケが分からなくなってしまう。これは末期高齢者の負け惜しみ？でも人間らしい知性は、単純な記憶の再現ではなく、記憶の巧みな編集によつて支えられて居ると言う事。記憶の編集力を鍛える事が人生を豊かにするのでは。

西郷隆盛

「命も要らず名も要らず、官位も金も望まぬ者ほど御し難し者無し。而れども、この御し難き者にあらざれば天下の大計図るべからず」

辰巳芳子（料理研究家）

「教育を受けるのはよい企業に就職する為ではない。あらゆる事象を判断し、すべての局面への対応する力を養うものだ。何の為に私は生きるのか、と言う事を考えさせなかった大学は月謝タダ取りだ」

寺田虎彦（一八七八年高知県生れ、東大卒、実験物理学、地理物理学、航空研究所、地震研究所英語、ドイツ語、フランス語、俳句、油絵、バイオリン演奏、一九三五年没）人間は、何度同じ災害にあつても決して利口にならぬもので有る事は歴史が証明する。何だか、炬燵を抱いて氷の上に坐つて居る様な気がする。科学は進歩するが、人間は昔も今も同じ

であるとと言う事を痛切に感じる。文明が進めば進むほど天然の猛威による災害がその熾烈の度を為すと云う事実である。文明が進むに従つて人間は次第に自然を征服しようとする野心を生じた。そして重力に逆らい、風圧、水力に抗する様な色々な造営物を作った。そして天晴れ自然の暴威を封じ込めたつもりになつて居ると。

昔々、我々の学生時代は現代の様に多様な娯楽はなく楽しみは読書だけ、当時、空襲に備えた灯火管制下の薄暗い中、お布団に潜つて懐中電灯を頼りに（灯りが屋外に漏れると敵機の標的になると）夢中になつて読んだ本の数々。当時は何処のお宅にも多彩な本が大量に本棚に並んで居た。それ等を小学生の頃から分厚い明治、大正文学全集等々、通学の電車の中やら歩きながら乱読。（今で言えば携帯メール）それぞれの内容、言わんとする趣旨が、現代に其の儘該当する事に深い感銘と共にオドロキを覚える。

地震の予知、台風の進路変更すら出来ない人間如きが、自然現象に太刀打ち出来る筈が無い。昨今の世情、一部の人はあろうが日本人の品格は何処へ行つたのだろう。

我々戦中派は「勿体無い」と何でもかんでも溜め込み、仕舞い込む悲しい習性。

認知症もどきの自分自身の人生の片付けも急がなければと、高い天袋やら押入れ、お納戸深く分け入り、アチコチぶつたり転げ落ちたりと悪戦苦闘！何とも悲惨な状況！

今暫し、仕分け人にお目こぼしを頂き、笑つて、喋つて、食べて、歩いて、寝てと、半ボケのアタマと口を懸命に駆使し、迫り来る認知症を予防する事に努めると致しましょう。無駄な努力？

豊島、追分、小金井の後輩の皆々様、お健やかにご活躍下さい。

1942
修学旅行

「聖地参拝旅行」

— 思えば遠く来たもんだ… —

佐藤喜一

(昭和十八年豊島小卒)

昭和十八年卒業の私たちは、多くが八十歳になった。すでに旅だった友もおられるが、赤・白・緑それぞれが年一回クラス会を開くし、豊島三二会という同期生の会も毎年盛大に開催されている。

入学したのが日中戦争が始まった昭和十二年。その秋、三十歳の若さで逝った中原中也の作品に「頑くない歌」という詩がある。冒頭の四行はこうだ。

思えば遠く来たもんだ／十二の冬のあの夕べ
港の空に鳴り響いた／汽笛の湯気は今いづこ

「天皇陛下万歳!!」と言って死ぬる人間になれ、と十五歳の夏まで教育された。されど、戦に敗れて六十五年。私たちは今、「思えば遠く」よりも、「はるかに遠く…」と呟いている。

「お国のために」の時代だから、修学旅行は「聖地参拝旅行」と銘うって実施された。

昭和十七年秋——日程は次のとおりだ。

○10月27日(火) 六年生全員 明治神宮参拝

○10月28日(水) 六時東京駅集合。六時四十分発

姫路行列車で西下。名古屋で乗り換え、十六時三十分発鳥羽行で関西・紀勢・参宮各線を通り、二十時十六分二見浦駅着。

〔松阪屋吸霞園泊〕

○10月29日(木) 二見浦・伊勢神宮等参拝。関西

急行(現在の近鉄)の電車で大和八木經由、橿原神宮等に詣でて奈良着。「大文字屋泊」

○10月30日(金) 徒歩で奈良市内見学。午後、電

車を乗り継いで明治天皇・昭憲皇太后陵・

乃木神社等参詣、京都三条へ。「吉岡屋泊」

○10月31日(土) 観光バスで京都市内見学。駅前

で夕食後、十九時五十一分夜行列車で帰京。

○11月1日(日) 東京駅十時十八分着。解散。

この旅の前年、太平洋戦争が始まった。鉄道も戦時輸送体制に切りかえられつつあった時代である。公立の他の小学校は、修学旅行臨時列車で出かけたようだけれど、私たちは一般客と混乗という形で、普通列車で運ばれた。バスによる京都市内見学以外はずべて徒歩。荷物を背負ってせせと歩いた。かなりハードなスケジュールだったが、銃後の少国民はひたすら耐え、落伍者も出さずに帰京した。

わが「旅行記」から

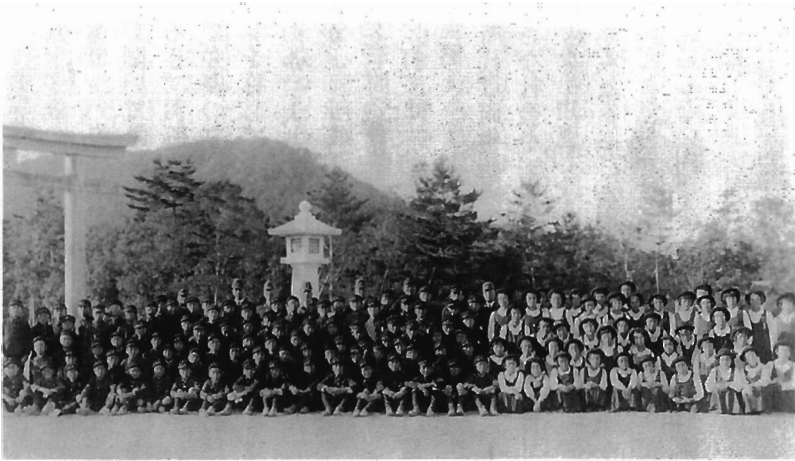
武運長久を祈る旅

戦時中疎開もせずに東京にいた。たたきつけるように焼夷弾が落ちたが、焼けなかった。だから、手元にはまだ「旅行記」が残っている。四〇〇字詰め六十数枚。メ切りの日の朝三時頃までかかってまとめた。かけがえのないモニユマンなのだが…。

鉛筆書きの原稿は読みにくくなっている。誤字・脱字の多い稚拙な文で、どなたにも読まれたくない「駄文」である。

それでも師はありがたい。きちんと読んで、赤ペンで「此の良き記録とともに、うれしく感謝を胸に」しめて、一生元気一ぱいにすすみなさい」と書いてくださった。17・11・17の検印まで押してある。この師こそ、わが白組の担任だった高橋早苗先生だ。

誰もが軍国少年だった。だから「旅行記」なるもの、どこへ行っても「大日本帝国万歳」であり、わが帝国は必ず勝つという決意の確認であり、皇軍の武運長久を祈る、といった言葉がちりばめられている。勇ましいといふべきか、おぞましいといふべきか。今考えると恥じ入りたいような言葉が、飛びかっている。



伊勢神宮にて

汽車キチの記録

軍国少年はまた鉄道少年でもあった。今でこそ鉄道ファンやマニアは、「鉄チャン」とか、「鉄子」などと呼ばれて、「テツ旅」を楽しんではいないが、当時は少々変わり者と見なされていて、「鉄キチ」とか、「汽車キチ」と言われたものだ。(キチは「気遣い」の略) キイチにとっては、「イ」が欠落してもあまり気にはしなかったが。

そんな少年だから、わが「記」にはかなりくわしくテツのことが書かれている。出発の日、六時四十分発の汽車は、「新しくできた10番線ホームから出た」とある。(今でもこのホームからは東海道の下り列車の多くが出る。特急「踊り子号」の多くはここから出発) 機関車はEF57(電気機関車)とか、十五輛編成の列車だ、とか。動き始めると「鉄道唱歌」の一節が刻まれ、あちこちに目を配ってる。

八年前に開通した丹那トンネルを抜ける時は、多くの犠牲者に追悼の意を表す。沼津ではC57というSLに交換するのを、ホームの先端まで見に行っている。浜松では十八分の停車。九時東京発の特急「つばめ号」の待ち合わせだ。「わが国第一級の機関車C59二輛に牽かれたつばめ」が、ホームのゴミをすべて僕らの方へ吹きとばして……などと記している。書きたてるとときりがない。

旅立ちの直前、鉄道省は列車の発着時刻を二十四時制にした。私の文にはまだ午前・午後の区別があるので、帰途の京都発は午後七時五十一分発、だ。十四時間半も揺られて、東京着。私たちは疲れ果ててぐっすりと眠ったようだが、先生方とくに先生の先生は、私たちが汽車のドア(当時は手動式)から転落せぬように、不寝の番をされたとか。

十二の秋の旅の、夜空のムコウにこだました汽車の汽笛は、まだ想い出の中で鳴りつづけている。

古稀の修学旅行

二十世紀が終わろうとするころ、どこからかあの「聖地参拝旅行」を再現してみようという声があった。京都はともかく、まだ健在であるらしい二見の宿に泊まってみようよということになった。そこで伊勢・奈良へ二泊三日の「修学旅行」を企画した。参加者は男女計十八名。

二〇〇〇年四月十九日、東京発は十時〇七分の「ひかり119号」。名古屋からは十二時十分発快速の「みえ7号」。かつてはなかった伊勢鉄道で河原田・津間をショートカットして快走、二見浦駅着は十三時四十五分。なんとあの旅よりも十時間も早く着く。



伊勢二見浦 松阪屋吸籠園 全景

早く着いても、ということでは手前の伊勢市で下車し、チャーターしておいた三重交通のバスで外宮・内宮の順に参拝、おかけ横町などを散策して二見へ、夫婦岩など眺めて懐かしの宿に着いた。

松阪屋吸籠園というその宿、表通りの方は模様がえしたようだが、本体はそのままだった。さすがに老舗旅館、当時の宿帳が残っていて、「豊島師範付属国民学校 生徒一三七人 先生九人」とあり、宿泊料・サービスタ料・弁当の種類内容、代表者高橋早苗先生の氏名までも書き残されていた。

五十八年目の古稀修学旅行。私たちと同年輩という女将さんのこの上ない歓待を受け、すこやかな夜を過ごした。夜半には雷鳴までとどろき、祝福してくれたようだ。

翌朝、宿の庭先の松林の中に、「二見の蛙」という詩碑を見つけた。清水みのる詩集『日本のオモチャの唄』の中の一編である。その第一連はこうだ

かえる かえる／二見の 蛙
なあにが かえる／なんでも かえる
ふしぎと かえる／かえる かえる

清水さんは、田端義夫の「別れ船」・「かえり船」・菊池章子の「星の流れに」といった歌謡曲、あるいは「森の水車」といった童謡など、多くの歌詞を手がけた人。

「蛙」は、二見興玉神社の蛙で、交通安全のお守りとして親しまれ、旅だけでなく貸したものが失くしたのも無事に「かえる」という縁起物として信仰されているという。

わずかに十八名だったけれど、私たちも無事に二見に帰ってこられたんだね、と、お互い笑みを交わしあったのだった。

クラス会をしました

猪俣節子（昭和十五年豊島小卒）

二〇一〇年五月十二日、ハイアットリージェンシー「F」翡翠宮「豊師附小・昭和十五年二十九回卒業」集い・・・

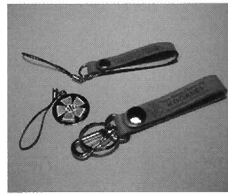
今年も又、それなりにお元気なお姿で現れました。おん歳八十？ワイワイ、ガヤガヤお口の方は至って達者！このお集まり「そろそろ打ち止め」なんてだーれもおっしゃらず、さつさと来年の幹事指名の発表と相成りました。メデタシ、メデタシ！



創立百周年記念品販売のご案内

附属小では昨年度母校育成会が中心となって記念品製作事業が行なわれました。創立百周年を祝うと共に記念品を製作・販売し、少しでも子供達の環境整備等に収益を回していこうというものでした。同窓会としてはその事業の一部、在庫を引取るという形で事業に参加し、協力をすることにしました。

真鍮製のストラップP300、革製のストラップP300、キーホルダーP300、文字入鉛筆、校章入タオル、エコバッグなどがあります。総会では販売を実施いたしますが、近々ホームページにも掲載する予定です。ご興味のある方には別途ご案内いたしますので、事務局の方へお問い合わせ下さい。なお、定価での仕入れですので、送料が別に掛かってしまうことをご了承下さい。それでは、ぜひ、ご検討を。



編集後記

編集担当 西山マサ子

この号の会報は、好評につき「恩師を語るパートII」を特集しました。附属ならではの父母と教師の関係の望ましい姿が、書き記されていきましたのが印象に残りました。今回は、特別寄稿二編を掲載しました。諸先輩の方々によって、より一層充実した会報になりました。

前回の会報をお読みになった方から、ご一報を頂きました。「恩師を語る」の特集は、興味を持つと共に学ばせて頂きました。高橋早苗・小山昌一・片山三雄・菅野信正・飛松正諸先生のことなど貴重な教育者の姿だと味わいました。

追分小学校の飛松正校長先生の奥様が百二歳でご健在であることが分かり、この会報をお読みになり、追分小学校の先生方のお名前を聞いて、当時の事を懐かしみお顔を思い出し、お嬢様と話が弾みましたとのことでした。大変感慨深く、五十年以上の時の流れが縮まった気がしました。

残念ながら会報の印刷をして下っていただきました山佐福栄様（享年六十九歳）が去る五月上旬に亡くなられました。会報が順調に発行出来たのも山佐様のおかげです。

お詫びとお願い

去年の会報発行後に原稿を学校にお送り頂き、編集係にも連絡を頂きながら、原稿が紛失し、どなたか分からなくなりました。誠に申し訳ございません。次回の会報に載せさせて頂きますので、ご一報下さい。また、十号の会報で写真を寄贈頂きましたのは、磯部雄彦様です。訂正させて頂きます。

寄稿のお願い

会報の紙面をより気楽に幅広い年次の方々楽しくお読み頂くために年間を通して、いつでも寄稿を受けることに致します。同期会、クラス会、同窓の仲間の集まりなど、写真に説明などを添えてお寄せ下さい。お待ちしております。

「撫子の会」会報・第十一号

発行 平成二十二年十月

この号の編集担当

金子修也（昭和二十五年追分卒）

西山マサ子（昭和三十三年追分卒）

野久尾悟（昭和五十一年小金井卒）

印刷 山信印刷（山佐和雄・昭和三十三年追分卒）

投稿・寄稿 問い合わせ先

川田紀雄 電話（042-324-9912）

西山マサ子 電話（03-3815-9619）

野久尾悟 電話（03-3720-8023）

同窓会事務局 東京学芸大学附属小金井小学校内

住所 〒184-8501 小金井市貫井北町四丁目一番一号

電話 042-324-9912 Fax 042-329-7826

撫子の会郵便振替口座

番号 00100-8-709121 加入者名：撫子の会